

会 報

No.34 (1989年10月)

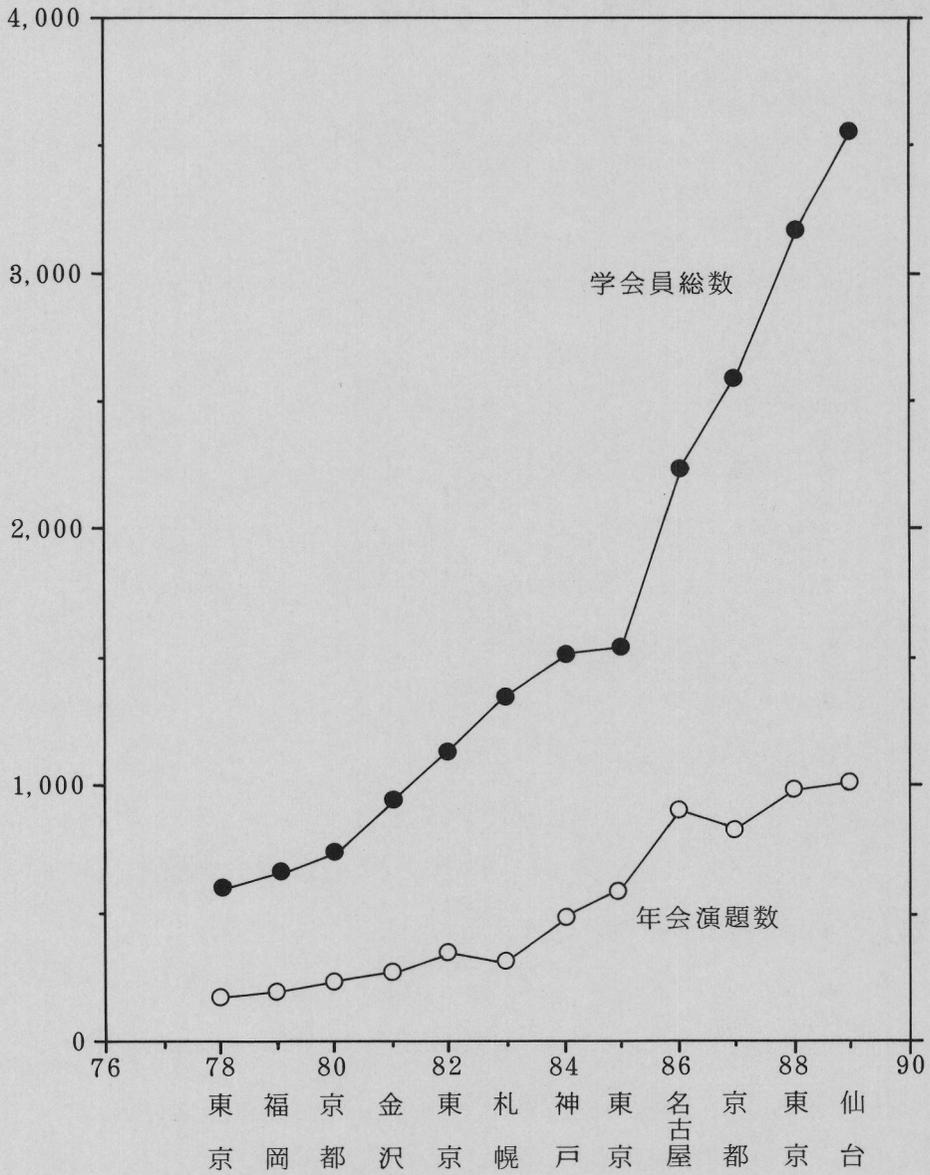
目 次

◆表紙裏－日本分子生物学会の12年	
◆第12回日本分子生物学会年会のお知らせ	1
◆1988年度会計収支決算報告	1
◆1988年度会計監査報告	2
◆各種研究助成などの本学会推薦について	2
◆ブレインサイエンス振興財団より	3
◆山田科学振興財団より	6
◆長瀬科学技術振興財団より	7
◆「ヒト・ゲノム研究の現状と展望」ワークショップのお知らせ	8
◆第40回タンパク質構造討論会ご案内	9
◆日本学術会議より	11
◆ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム(HFSP) について	12

日 本 分 子 生 物 学 会

(THE MOLECULAR BIOLOGY SOCIETY OF JAPAN)

日本分子生物学会の12年



◆第12回日本分子生物学会年会のお知らせ

年会のプログラムが印刷できましたのでお届けいたします。尚、年会についてのお問い合わせ、ご連絡は下記宛にお願いいたします。

〒113 東京都文京区本郷2-40-14
 (財)日本学会事務センター
 学術講演会業務部
 第12回日本分子生物学会年会係
 電話 (03) 817-5831

◆1988年度会計収支決算報告

1988年度学会会計収支決算は以下の通りになりましたので報告いたします。

第5期 会計幹事 山本正幸

1988年度日本分子生物学会収支決算書 (1988年4月1日～1989年3月31日)

〔I〕収入の部

科 目	予算額	決算額	摘 要
学 会 費	6,500,000	7,575,651	(入会金 529,000 正会員 5,592,000 学生会員 1,312,000 外国在住会員 142,651
賛 助 会 費	1,020,000	930,000	
廣 告 収 入	1,200,000	1,842,500	会員名簿広告料
預 金 利 子	95,000	175,736	
寄 付 金 入	—	1,000,000	第11回年会より
雑 収 入	—	15,000	
小 計	8,815,000	11,538,887	
前 年 度 繰 越 金	5,000,000	6,901,909	
総 計	13,815,000	18,440,796	

〔II〕支出の部

科 目	予算額	決算額	摘 要
事 業 費	2,350,000	2,148,000	
会 報 発 行	700,000	688,000	
プ ロ グ ラ ム 金	450,000	360,000	第11回年会
特 別 講 演 謝 金	200,000	100,000	〃
第12回年会補助	1,000,000	1,000,000	
評 議 委 員 会 費	1,400,000	1,452,800	
委 員 会 費	400,000	0	
役 員 選 挙 名 簿 作 製 費	1,000,000	1,452,800	選挙封筒の印刷代含む
業 務 委 託 費	2,940,000	3,663,903	(財)日本学会事務センター
一 般 事 務 費	2,630,000	3,014,921	
用 品 費	5,000	0	
印 刷 費	25,000	63,340	
通 信 費	2,200,000	2,917,821	名簿ページ増による郵送料アップ
事 務 謝 金	400,000	0	
そ の 他	—	33,760	
予 備 費	4,495,000	0	
小 計	13,815,000	10,279,624	
次 年 度 繰 越 金	—	8,161,172	
総 計	13,815,000	18,440,796	

◆会計監査報告

1989年5月29日、会計簿、預金通帳、領収書、学会センター出納記録などの監査を行ない、決算に誤りのないことを確認しました。

日本分子生物学会第5期会計監査

飯野徹雄 ㊞

深沢俊夫 ㊞

◆各種研究助成などの本学会推薦について

○平成元年度（第16回）日産学術研究助成候補として本学会選考委員の意見にしたがい、下記6件を推薦した。

〔一般研究A〕

大島 靖美（九大・理）「変異株の分離と利用によるmRNAスプライシング及び輸送に関与する因子の解析」

有賀 寛芳（北大・薬）「核内癌遺伝子産物によるDNA複製と転写調節」

静田 裕（高知医大）「ADP-リボシル化反応の分子遺伝学的研究」

〔奨励研究〕

岡崎 孝映（阪大・微研）「増殖と分化を調節するヒト遺伝子の単離と機能解析」

刀祢 重信（和歌山県立医大）「インターフェロン・ガンマによるヒト細胞に対する増殖阻害作用の分子機構の解明」

加藤 幹男（大阪府立大・総合科学）「tRNAの保存配列の役割；コドン識別とタンパク質生合成系のなりたち」

○同じく平成元年度（第6回）井上学術賞候補として下記一名を推薦した。

花岡 文雄（理研・放射線生物）「哺乳類細胞遺伝子複製機構の分子遺伝学的研究」

○同じく1989年度（第3回）東燃研究奨励賞候補者として下記二名を推薦した。

塩見 春彦（京大・ウイルス研）「成人T細胞白血病ウイルス1型（HTLV-1）の核小体蛋白質 Rex における機能領域の同定」

前田 明（九大・理）「mRNA前駆体スプライシング機構の研究」

○同じく1989年度（第3回）加藤記念研究奨励賞候補者として下記二名を推薦した。

渡辺 利雄（東大・応微研）「マウスフレンド白血病細胞，マウステラトカルシノーマ細胞（F9）の細胞分化の分子機構」

荒木 栄一（熊本大・医）「ヒトインスリン受容体遺伝子発現調節機構の解析」

○同じく平成元年度（第30回）東レ科学技術研究助成候補として下記二件を推薦した。

山本 正幸 (東京大学理学部生物化学科)

「細胞の増殖様式の変換を制御する分子機構」

岡田 典弘 (筑波大学生物科学系)

「ヒトAluファミリー及び関連配列の機能に関する研究」

○山田科学振興財団より、畑中正一 (京大・ウィルス研) 「核小体シグナルの研究」及び、泉井桂 (京大・理学部) 「C₄光合成遺伝子の発現調節機構」の二件に対して1989年度山田科学振興財団研究援助金が贈られるとの連絡があった。

◆ブレインサイエンス振興財団より

すべての推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03) 273-2565 (直通)

平成元年度 (第4回) 研究助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件100万円、助成件数は8件以内とする。

3. 推薦者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。(複写用紙を用いてもよい)

6. 推薦締切日

平成元年12月20日 (水) とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年5月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成3年4月中に提出すること。

11. 成果の報告

研究の成果については、平成3年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願ひする。助成金による研究を専門誌に発表する場合には、「財団法人ブレインサイエンス振興財団（英文の場合は、Brain Science Foundation）の助成による」旨を書き添えること。

平成元年度（第4回）塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

1. 趣 旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者（国内外を問わない。）に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する。

2. 褒賞金

贈呈件数は2件以内とし、賞牌ならびに副賞（100万円）を贈呈する。

3. 推薦者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。（複写用紙を用いてもよい。）

6. 推薦締切日

平成元年12月20日（水）とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 選考結果の通知

平成2年3月末日までに推薦者および受賞者あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈 その他

贈呈決定者に対して、別途通知する。

平成元年度（第3回）海外派遣研究助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間（6ヶ月以内）の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし、平成2年4月から平成3年3月の間に出発出来るものに限る。

2. 助成予定額

- (1) 予算として150万円を計上している。
- (2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、50万円を限度として若干件を助成する。

3. 推薦者

- (1) 関係学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。（複写用紙を用いてもよい。）

6. 推薦締切日

平成元年12月20日（水）とする。

7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書（学会、シンポジウム等参加の場合は、参加証明書または招待状の写を、短期の共同研究の場合は、受入機関または共同研究者の手紙の写）を添付すること。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年4月以降に出発時期に応じて送呈する。

11. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成課の報告

帰国後2カ月以内に派遣の成果について、報告書を当財団に提出すること。

平成元年度（第3回）海外研究者招聘助成候補者推薦要領

1. 趣 旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘（旅費または滞在費）を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招聘の時期

平成2年4月1日から平成3年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助成予定額

(1) 予算として100万円を計上している。

(2) 1件あたりの助成額は、往復の航空運賃または滞在費とし、50万円までを限度として必要額を助成する。

4. 推薦者

(1) 関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

5. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

6. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。（複写用紙を用いても良い。）

7. 推薦締切日

平成元年12月20日（水）とする。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成2年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成2年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。

11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

招聘の成果について、招聘後2ヶ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

◆山田科学振興財団より

1990年度 山田科学振興財団研究援助候補推薦要領

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助をします。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件あたり300～700万円、総額6,000万円。援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考します。
3. 援助金を給与にあてることはできませんが、他の使途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年度間とします。

推薦方法

- イ. 推薦者 本財団が依頼した学(協)会の代表者
- ロ. 推薦件数 1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続 推薦者は、以下の書類を整え、ご送付願います。
 1. 所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したものの4部
 2. 添付書類(研-5ページ参照)

記載上の注意

- イ. 紙面不足のときには、同型同大の別紙で追加して下さい。
- ロ. 研-1ページ欄外の脚注には記入しないで下さい。
- ハ. 代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日 本財団へ推薦書が到着する締切期日は1990年3月31日です。

選考方法 選考委員会において選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知 1990年7月迄に推薦者及び代表研究者等にあてて通知します。

援助金の贈呈 選考結果の通知後、適時贈呈します。

推薦書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)
〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号
電話 大阪(06)757局3311(代表)

研究の成果又は会計の報告

援助金の受領者に対して、必要に応じ、研究経過、研究成果、又は会計について報告書の提出又は発表を求めます。

付

- イ. 援助金の使途を変更する場合には、予め本財団の承諾を得て下さい。
- ロ. 研究成果を文書によって発表される際には、本財団(財団法人 山田科学振興財団, Yamada Science Foundation)の援助による旨を記載し、報文の類いにあつてはその別刷1部、また著書の類いにあつてはその1部をご寄贈願います。
- ハ. ご提出いただきました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

研究者各位へ

推薦者の項に対応する学(協)会は下記のとおりです。学(協)会により締切期日及び募集方法等が異なりますから、代表研究者は応募の際、各学(協)会にお問い合わせ願います。

日本天文学会 地球電磁気・地球惑星圏学会 日本薬学会 日本分子生物学会 日本発生物学会

日本物理学会 日本化学会 日本生化学会 日本動物学会 日本植物生理学会
応用物理学会 高分子学会 日本生理学会 日本細胞生物学会 日本植物学会
日本金属学会 日本農芸化学会 日本遺伝学会 日本生物物理学会 日本免疫学会

◆長瀬科学技術振興財団より

平成2年度助成候補者募集（研究機関推薦）

財団法人長瀬科学技術振興財団においては、下記の通り平成2年度の研究助成を行なう事と致しました。（研究助成対象等の詳細は長瀬科学技術振興財団までお問い合わせ下さい。）

—記—

- (1) 研究助成対象
 - ① 生化学及び有機化学等の分野において研究活動を行なう研究者又は研究機関
 - ② 生化学及び有機化学等の分野において研究活動を行なう研究者の海外派遣又は招聘
- (2) 件数及び金額
 - ① 研究助成金 1件250万円程度 十数件
 - ② 国際交流助成金 1件50万円程度 数件
- (3) 応募の締切
平成元年12月末
- (4) 交付の時期
平成2年4月予定
- (5) 問い合わせ先
〒550-91 大阪市西区新町一丁目1-17
財長瀬科学技術振興財団 TEL06-535-2117

◆「ヒト・ゲノム研究の現状と展望」ワークショップのお知らせ

公開ワークショップ

ヒト・ゲノム研究の現状と展望（第1回）

1989年12月11日（月） 9：30-17：30

12月12日（火） 9：30-17：30

湯島ガーデンパレス：東京都文京区湯島1丁目7-5

TEL：03-813-6211

文部省総合研究A「ヒトゲノムプログラムの推進に関する研究」（代表：松原謙一）の主催により、上記のワークショップを開催致します。

今回は、以下の主要な6テーマに関する演題を一般から広く募集致します。奮ってご応募下さい。

1. ヒト・ゲノムの解析

（遺伝子マップ、リンケージマップ、フィジカルマップ、ゲノムライブラリー、染色体の機能・構造ドメインなど）

2. cDNAライブラリーの作製と解析

（cDNAライブラリー作製の新技术、組織・器官・染色体特異的cDNAライブラリーなど）

3. DNA解析技術の開発

（染色体ソーティング、巨大DNAの分離やクローニング、DNAの特異的切断、DNAシーケンシングの新しいアプローチなど）

4. 大量情報処理系の開発

（DNA・遺伝子マップデータベース、解析ソフトなど）

5. 各種生物ゲノムの解析

6. ヒト・ゲノム解析の諸問題

（推進の基本方針、医学的・社会的・倫理的波及効果など）

抄録はB5版用紙（1枚）に演題・氏名・所属・要旨の順に、ワープロまたはタイプで横書きに作製して下さい（日本語、英語可）。

尚、プログラムの編成は主催者にご一任下さい。

抄録の締切：11月10日（金）必着

抄録送付先：〒160 新宿区信濃町35

慶應大学・医学部・分子生物学教室

ヒトゲノム・ワークショップ係（TEL：03-353-1211 内線2721）

文部省総合研究A「ヒトゲノムプログラムの推進に関する研究」班

代表：松原謙一（阪大・細胞工学センター）

ワークショップ世話人：石浜 明（国立遺伝研）、榊 佳之（九大・遺伝情報）

清水信義（慶大・医学部）、高浪 満（京大・化学研）

吉田光昭（東大・医科研）

◆第40回タンパク質構造討論会ご案内

共 催：日本化学会・日本生化学会・日本生物物理学会・日本薬学会・日本農芸化学会・日本分子生物学会・日本蛋白質学会

日 時 1989年11月7日(火)、11月8日(水)

会 場 吹田市文化会館メシアター(中ホール)(〒564 吹田市泉町2-29-1)

T E L 06-380-2221

〔交通〕阪急千里線 吹田駅前, JR京都線 吹田駅より徒歩10分

(発表20分, 討論10分)

第1日(11月7日) — (10時00分から) —

1. フーリエ変換赤外分光法による水溶液中のタンパク質の熱変性過程の研究
(東大・理, 順天堂大, 東工大・理) 山本達之, 田之倉 優, 猪飼 篤, 田隈三生
2. 蛋白質の酸変性状態の構造- β -ラクタマーゼ, アポミオグロビン, シトクロムc
(阪大・理, オリフォルニア大・サンタクルーズ分校) 後藤祐児, 高橋信明, A.L. Fink
3. 蛋白質工学によるヘモグロビンの協同効果発現機序の研究: 4次構造転移における特定水素結合の寄与(京大・工, 阪大・医, 阪大・基礎工, 分子研, 大阪府母子医療センター) 石森浩一郎, 森島 績, 今井清博, 伏谷建造, 宮崎源太郎, 北川禎三, 和田芳直
4. 水素結合パラメーター(オリンパス工学・バイオメディカルリサーチセンター) 永田 宏, 宮川厚夫
5. 新ジョイント法によるタンパク質の二次構造予測(蛋白質工学研, ナショナルリサーチカウンシル・カナダ)
西川 建, 野口 保, 小西康夫

〔昼 食〕

— (13時30分から) —

6. タンパク質工学によるヒト膀胱分泌性トリプシンインヒビターの一時的阻害機構の解明(塩野義製薬) 菊池典久, 永田 清, 新 優, 寺岡 宏, 吉田信男
7. D-アミノ酸トランスアミナーゼの活性中心構造について(京大・化研, 阪大・産研) 吉村 透, 西村克史, 谷沢克行, 江崎信芳, 左右田建次
8. ジスルフィド結合欠損型ヒトリゾチームの構造(蛋白質工学研) 伊中浩治, 松島正明, 谷山佳央, 菊池正和, 森川耿右
9. ペプチジルプロリルシストランスイソメラーゼ(シクロスポリンA結合蛋白質)の構造と機能(東亜燃料工業) 高橋信弘, 早野俊哉, 榎 昇, 鈴木正則
10. 遺伝子工学を用いた光駆動H⁺ポンプ(バクテリオロドプシン)の構造と機能の解析(東大・理) 茂木立三
11. H⁺-ATP合成酵素の構造と機能の対称性と非対称性(東工大・理・生命理学) 吉田賢右, 尾高雅文, 三上敬史, 横山 謙
12. アスパルターゼの高次構造形成と機能発現(京大・理) 今石浩正, 湯元 昇, 徳重正信
13. キサンチン脱水素酵素からキサンチン酵化酵素への変換と構造変化(横浜市大・医・生化学, 名大・農, 日本ロッシュ研究所, ミシガン大・医・生化学, マックスプランク研究所・ハイデルベルグ・生物物理) 西野武士, 斉藤達也, 西野朋子, 天谷吉宏, 山崎健一, 野田久美, 佐藤三佐子, L.M. Schopfer, V. Massey, N. Shiering, E.F. Pai

— (18時00分から) —

〔懇親会〕

懇親会会場: 同館レセプションホール

第2日(11月8日) — (9時45分から) —

14. NADH-シトクロム b_5 還元酵素のヌクレオチド結合部位の構造解析(大分医大・生化学, 九大・遺伝情報)
指吸俊次, 調 恒明, 竹下正純, 小林 靖, 服巻保幸, 榊 佳之
15. チトクロムP-450の構造と機能: 人工的変異の利用による基質作用部位の推定(阪大・蛋白研, 阪府大・農,
チバガイギー・国際研, 酪農大・獣医) 今井嘉郎, 宇野知秀, 中村正彦, 太田大策, 横田 博, 佐藤 了
16. 精製前駆体を用いた蛋白質のミトコンドリア局在化機構の解析
(熊本大・医・遺伝医学研究施設) 村上 薫, 森 正敬
17. ミトコンドリアタンパク質前駆体の膜透過機構: 酸性リン脂質による前駆体のunfolding(群馬大・工業短期
大学部, バーゼル大・バイオセンター) 遠藤斗志也, 大屋正尚, M. Eilers, G. Schatz
18. 400MHz プロトンNMRで見たNADPH-アドレノドキシン還元酵素とNADP及びアドレノドキシンの相
互作用(香川医科大・医・生化学) 三浦成敏, 市川佳幸
〔昼 食〕

— (13時15分から) —

19. ^{13}C -NMR スペクトルを用いるプロテアーゼとの複合体形成に伴うStreptomyces Subtilisin Inhibitor (SSI)
の立体構造変化——タンパク性プロテアーゼ阻害剤SSIの分子設計原理(都立大・理, 東大・工) 甲斐荘正
恒, 三宅洋子, 葦沢輝美, 小島修一, 熊谷 泉, 三浦謹一郎
20. 部位指定変異SSIとサブチリシンの複合体のX線結晶構造解析(東大・薬, 東大・工, 長岡技科大・工) 竹
内康雄, 野口修治, 佐藤能雅, 小島修一, 熊谷 泉, 三浦謹一郎, 三井幸雄
21. 標野分子を結合したカルモジュリンの構造——溶液X線散乱法によるアプローチ(札医大・化学, 札衛生短
大・物理, 北大・理・高分子)
能野秀典, 松嶋範男, 和泉義信
22. ヒト・カルバスタチン蛋白の, サブドメイン構造と活性の関係(宝酒造・バイオ研, 京大・ウイルス研, 京
大・医) 浅田起代蔵, 上森隆司, 下條智子, 君塚房夫, 加藤郁之進, 牧 正敏, 畑中正一, 村地 孝
23. サラホトキシンの構造活性相関(東北大・理, 阪大・蛋白研, 日本レダー・生物研) 高崎規久, 北条裕信,
相本三郎, 北角和浩, 柴富志治, 西木克侑
24. 蛇毒の金属プロテアーゼ: 出血性(HR 1 BとHR 2 a)及び非出血性プロテアーゼ(H_2)の全一次構造決定
(九大・医・分子生命, 九大・理・生物, 国立予研・体液性免疫部) 武谷浩之, 宮田敏行, 荒川満枝, 小田恭
子, 小関 靖, 佐藤 保, 岩永貞昭
25. β -ガラクトシド結合性レクチンのアミノ酸配列, cDNA配列, 及び遺伝子構造の解析(帝京大・薬・生物化
学) 平林 淳, 大山雄二, 坂倉康彦, 笠井猷一

参加費: 1,500円

懇親会費: 3,000円(学生 1,500円)

講演要旨集代: 一部 1,500円

連絡先: 〒565 吹田市山田丘3-2

大阪大学蛋白質研究所

第40回タンパク質構造討論会

世話人 崎山 文夫

TEL 06-877-5111 内線3861~64

◆日本学術会議より

日本学術会議だより No.14 (抜粋)
人間の科学特別委員会設置される

平成元年8月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月に開催した第107回総会において、人間の科学特別委員会を追加設置しましたが、今回の日本学術会議だよりでは、この特別委員会に加えて、最近発表された「委員会報告」等について、お知らせいたします。

人間の科学特別委員会の設置

本会議は、本年4月に開催した第107回総会において、それまでにすでに設置していた7特別委員会のほかに、「人間の科学特別委員会」の追加設置を決定した。

この人間の科学特別委員会は、同総会中に、委員会の構成(各部2人ずつ計14人)を済ませるとともに、第1回目の委員会を開催する等、直ちに、その活動を開始した。委員長には、中山和久第2部会員が就任した。

今回、本会議が、この特別委員会を設置した理由は次のとおりである。

〈人間の科学特別委員会の設置理由〉

ヨーロッパの産業革命に端を発した科学技術の進歩は急速にその度を加え、かつて人類が予想もしなかった程度に物質文明を開花させたが、一方、それによって人類は、過去に見られなかった重大な危機に立たされている。科学技術の進歩は一面において物質偏重の価値観を強め、生命に対する技術介入に係る不安や、地球生態系の激しい変化を招き、社会経済環境にも様々な問題を醸し出している。

人間が創り、人間が発展させてきた科学は、本来、真理を追求し、人間の幸福に貢献すべきものであるにもかかわらず、人類の生活や自然・社会環境に混乱を招いている側面もあるのではないかとのも矛盾も感ぜられ、ここに科学者の苦悩がある。我々は今や、科学の在り方を再考し、早急に人間と科学技術との不調和を克服する視点を明らかにしなければならない。

このためには、「人間とは何か」を問い直し、「人間存在の理法」ともいべき概念を改めて考え、そこに立脚して、科学技術と自然との調和を求め、人類進歩への展望を模索することから始めなければならない。

人間の人間たる特質はその精神であることを思えば、人間を知性、感性の面から広く捉え、人間そのものについてのもっと深い知識と理解が強く望まれる。この立場から、人間を個体としてばかりでなく、生物学的並びに社会的集団として把握し、人間の総合理解に努める必要がある。

この特別委員会は、このように人間を学際的、総合的に把握し、人類の危機に対処することを目指すもの

である。

「委員会報告」2件を発表

このたび、本会議の「生命科学と生命工学特別委員会」と「化学研究連絡委員会は、それぞれ、当面の重要問題に関する審議結果を取りまとめ、本会議運営審議会の承認を得て、「委員会報告」として発表した。各「報告」の要旨は次のとおりである。

ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進 について—生命科学と生命工学特別 委員会報告— [要旨]

ヒト・ゲノムの全DNA配列決定を主たる目標とするヒト・ゲノム・プロジェクトは、極めて大きなインパクトを学術研究に与えると期待され、我が国として早急かつ重点的に推進すべきである。そのためには推進組織を設け、基本計画の立案、実施計画の策定、省庁間などの協議、国際協力、データ・ベースとレポジトリ整備などを総合的に行うべきである。一方この推進組織と並んでこれと密接に連携し、研究計画の実施に伴う社会的・法律的・倫理的諸問題を客観的・公正に判断することを目的とするチェック機構を設立し、調和のとれた施策を進める必要がある。

大学等における化学の研究環境の整備 について—化学研究連絡委員会報 告— [要旨]

化学研究連絡委員会は、昭和63年に発表された日本化学会報告書を参考資料として、大学等における化学分野の研究環境の現状について検討を行った。その結果、「全国的視野に立つ化学の新しい研究体制」の実現に向けての努力を傾注するとともに、現行の研究環境を抜本的に改善するために、関係方面に強く訴えるべきであるとの結論に達した。日本化学会報告書に盛り込まれている数項目の重点施策のうちでも、特に、①先端研究設備の購入・維持予算の大幅増額、②研究基盤整備のための大学院関連予算の充実、③化学の特殊性を配慮した研究室面積の拡充、は緊急に実施すべきものと考えられる。

◆ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP) について

標記の件につき、科学技術庁科学技術政策局HFSP推進室より案内が届きましたので抜粋を転載します。

1. ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP)

ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムは、生体を持つ精妙かつ複雑な機能の解明を中心とする基礎研究を国際的に共同して推進し、その成果を広く人類全体の利益に供しようとするを目的とする。

HFSPは、1987年のベネチア・サミットにおいて日本政府より提唱。研究助成事業等の推進により国際公共財を創出することを目指した経済サミット参加国主導の国際協力プロジェクトとして、科学的、行政的な検討を経て（8. 経韓参照）1989年度より世界の科学者の国境を越えた研究活動への支援（研究グラント、フェロースhip、ワークショップ事業）を行うものである。

2. 本プログラムの意義

生体機能のメカニズムを今日の先端科学技術を駆使することにより解明することは、知的探求を促進するとともに、今後の科学技術シーズを創出し、多くの研究分野の発展の牽引力としての役割を果たすことにより、人類に大きな貢献をもたらすものである。本分野において積極的に国際協力を推進することにより、新しい科学技術を媒介として、一層の人間と自然の調和が図られ、人類全体にとって多大な恩恵がもたらされるものと期待される。

生体機能の解明のための基礎研究は、人類共通の課題として世界の科学的な英知を結集することにより取り組まれるべきものであり、国境や制度の壁を越えて、スムーズに人材交流、情報交換、共同研究等を実施できるようなtrans-nationalな協力体制をつくりだすことが重要。

3. 本プログラムの実施に当たっての基本原則

(1) 世界の科学者の国境を越えた研究活動への特色のある支援（助成）。

研究者の「国際協力」の促進、研究者の「独創性」、「革新性」等の最大限の発揮、「若手研究者」の育成・活用、「学際性」の重視、柔軟な事業の運用。

(2) 研究成果を広く公表。知的所有権の帰属については、研究当時者間等で適切に処理。生命倫理については、研究実施国の規則に従い厳密に考慮。

4. 実施体制

本プログラムの実施主体である国際HFSP推進機構（仮称、非営利機関）はフランス・ストラスブールに本年秋に設立される。（以下略）

5. 研究対象領域

(1) 本プログラムの研究対象領域を当面以下の2領域とし、更に、限られた資源の効率的な配分及びテーマ選定等事業運営の効率性を考慮し重点研究分野を設定。

A. 脳機能の解明のための基礎研究

重点研究分野——知覚・認知機能、運動・行動機能、記憶・学習機能、言語・学習機能

（4分野）

B. 生体機能の分子論的アプローチによる解明のための基礎研究

重点研究分野——遺伝情報発現機能、形態形成機能、分子認識・応答機能、エネルギー変換機能

（4分野）

なお、上記の2つの領域の基礎研究を支えるものとしての支援的な技術に関連した研究も本プログラムの研究領域として含まれる。

6. 事業内容及び事業規模

A. 研究グラント——「国際共同研究チーム」への研究費の助成

- (1) 2カ国以上の研究者からなる国際共同研究チームを対象。ただし、研究代表者は本プログラムの対象国の研究者。

注) 対象国は、1989年度においてはサミット国。ただし、E C加盟国の研究者がE C委員会を通じて申請する場合は対象国の研究者と同等の資格を得ることが出来る。

- (2) 若手研究者に焦点を当てる。
- (3) 助成期間は通常3年以下。
- (4) 助成額は申請された研究テーマの性格等によるが、参考までに言えば50万米ドル/件・年程度を限度。
- (5) 対象経費は、備品、消耗品、旅費、人件費等。

B. フェローシップ——若手研究者が国外で研究を行うための旅費、滞在費、研究費 (bench fee) 等の交付

- (1) 長期フェローシップと短期フェローシップの制度を設ける。
- (2) 対象国の研究者が他国の研究機関に行く場合及び非対象国の研究者が対象国の研究機関に行く場合を対象。
- (3) 長期フェローシップ
 - ・通常、期間は3か月から2年。
 - ・通常、博士号取得後7年以内又はこれと同程度の能力を有する若手研究者。
 - ・助成額は、5万米ドル程度を限度。
- (4) 短期フェローシップ
 - ・期間は2週間から3か月。
 - ・申請は常時受け付ける。

C. ワークショップ——最先端の研究課題について、情報交換、討議等を行う国際的な研究会への助成

- (1) 研究者からの申請によるものと機構が企画するものの2とおり。
- (2) 対象
 - ・オーガナイザーは本プログラムの対象国の研究者。
 - ・参加者はまさに研究を行っているactive (若手) な研究者を中心。
- (3) 助成額は、1件当たり10万米ドル程度を限度。ただし、地域性を考慮。
- (4) 機構は、本プログラムの基本原則等に反しない限りにおいて、他の機関とワークショップを共催することができる。

D. 事業規模

1989年度 (1990年3月まで) の事業規模については、各事業毎の予算と申請額との関係において決定されることとなると思われるが、おおよその目安として研究グラント約20件、長期フェローシップ約100件、短期フェローシップ約50件、ワークショップ約10件がそれぞれ上限になるものと考えられる。

7. 審査

(1) 審査方法

本分野の世界の一流の科学者より構成される審査委員会及びメール・レビュー (ピア・レビュー) により、審査が実施される予定。

(2) 審査基準

助成対象の審査の最も重要な選定基準は、科学的見地からの研究の「質の高さ」であり、「intercontinental等の国際性」及び「学際性」を重要な判断のポイントとして行われる。

8. 経緯 (略)

9. 今後のスケジュール

1989年度（1990年3月まで）事業実施に係るスケジュールの目途は以下の通り。

- [1989. 8月下旬
～9月初旬] 研究グラント, 長期・短期フェローシップ, ワークショップの公募開始。
- [1989. 10月上旬] 国際HFSP推進機構をフランス・ストラスブールに設立。
- [1989. 11月中旬] 研究グラント, 長期フェローシップ, ワークショップの公募締切。
- [1989. 11] 申請書の審査（メール・レビュー）の開始。
- [1989. 11月下旬] 短期フェローシップの公募締切。
- [1990. 1～3] 審査委員会の開催, 助成対象者の決定, 助成金の交付。

(問合せ先)

国際HSFP推進機構

設立準備室

〒100 東京都千代田区霞が関2-2-1 科学技術庁内

電話番号 03-501-3490 (直通)

03-581-5271 (内線723, 340)

F A X 03-581-3079